

《コメント》

戦後サークル詩運動のなかの『われらの詩』

宇野田 尚哉

はじめに

私が期待されているのは戦後サークル詩運動という観点からコメントすることであろうと思われるので、その観点から情報を補うことに主眼を置いてコメントすることにする。

1. 戦後サークル詩運動研究の近年の動向とその問題点

近年の戦後サークル詩運動研究における顕著な動向としては、五〇年代サークル詩運動関係資料の相次ぐ復刻ということを指摘することができる。最近復刻された／近々復刻される予定の資料を列挙すると、次のようになる。

- ・『地下戦線』『炭砦長屋』（53・5～56・5）…筑豊（日本炭礦高松坑）の炭鉱労働者の詩誌
- ・『ヂンダレ』『カリオン』（53・2～63・2）…大阪猪飼野の在日朝鮮人の詩誌

- ・『詩集下丸子』～『突堤』（51・7～59・5）…東京南部の労働者の詩誌
- ・『琉大文学』（53・7～？）…琉球大学の学生の詩誌

このように、独自性と一般性を兼ね備えた重要な資料が相次いで復刻されつつあり、五〇年代のサークル詩運動を複眼的に捉えることが可能になりつつある。

一方で、上述のような資料復刻と連動した近年の研究動向には、次に指摘するような問題点もある。すなわち、復刻された資料が、五〇年分裂後の日本共産党において主流派がヘゲモニーを握ったあとのものに偏っていて、五二年の武装闘争とその前後の文化工作に関心が過剰に集中している、という点である。そのことを踏まえて言うなら、上記の資料を戦後サークル詩運動の大きな展開のうちに位置づけなおしつつ議論を次の段階に進めるべき時がすでに来ていると言うべきであろう。

その際、最も有力な手がかりとなるのは、広島事例、具体的に言うなら、峠三吉を中心として発行されたサークル詩誌『われらの詩』であろうと私は考えている。

2. 『われらの詩』の特徴

まずサークル詩誌『われらの詩』について概観しておく、一九四九年一月峠三吉を中心として「われらの詩の会」結成、一月二〇日『われらの詩』第一号発行、一九五三年三月の峠三吉の死を経て、同年一月の第二〇号をもって途絶、という経緯をたどった。なお、ここでは立ち入れないが、『われらの詩』につ

いて考える際には、広島地方文学サークル協議会（一九四八年一月結成）の機関誌『広島文学サークル』（一九四九年三月から一九五〇年一月にかけて四号発行）がその重要な前提となっていたという点に十分に留意する必要がある。

かつて私が復刻に関わった『ヂンダレ』（大阪の猪飼野で一九五三年から五八年にかけて発行された在日朝鮮人のサークル詩誌）と比較するならば、『われらの詩』の会員の特徵としては、学歴が高い、安定した仕事についている、職場・地域・学校・療養所などのサークルのリーダー格の人々が多い、といった点を指摘することができる。実際、「われらの詩の会」の発起人は、かつて広島地方文学サークル協議会に結集していた職場サークルのリーダー格の人々であり、その中心は中国配電文学サークルの且原純夫（一九二九生まれ）と国税局文学サークルの増岡敏和（一九二八生まれ）であった。

次に雑誌としての特徴について考えてみると、広島県とその周辺の諸々の詩サークルをとりまわって中央の新日本文学会につながるという役割を果たす山陽地方の拠点サークルであった、という点を挙げることができる。この点と関わっては、「われらの詩の会」が支部制をとっていたという点も重要である。そのことも踏まえて、『われらの詩』と関わりの深かった諸サークルをサークルの性格別に例示してみるならば、次のようになる。

- ・ 職場サークル：中国配電文サ、国税局文サ、三原車輛文サほか
- ・ 地域サークル：蘆品・豊田・西条・世羅・比婆・三良坂・三次などに支部設置

- ・ 学校サークル：広島大学とだえざる詩の会
- ・ 療養所サークル：国立広島療養所内高原詩の会、国立岩国病院内われらの詩の会支部

『われらの詩』は、山陽地方のこれらのサークルを相互につながるとともに、それらを中央と結びつけるという役割も果たしていた。なお、「われらの詩の会」の中心が職場サークルのリーダー格の人々であったということと関わって付け加えておくならば、『われらの詩』はレッド・パージの影響をもろに受けることになったサークル詩誌であったという点も重要であろう。

3. 私が峠三吉／『われらの詩』を次の拠点とする理由

かつて『ヂンダレ』の復刻に関わった私は、峠三吉／『われらの詩』を、自分の戦後サークル詩運動研究の次の拠点にしたいと考えている。その理由は、次の通りである。

一点目は、被爆地広島詩誌である、という点である。峠三吉／『われらの詩』は、〈被爆体験と文学〉という問題を考えるうえでも、平和運動・反核運動の系譜を考えるうえでも、逸するとはできない。

二点目は、一九四九年一月という微妙な時期にのちに国際派の牙城となる広島で創刊され、国際派指導下の一九五〇～五一年の闘争、主流派指導下の一九五二～五三年の闘争を経て、五三年一月まで続いている、という点である。すなわち、一九四〇年代後半からの連続と断絶、国際派の問題、主流派の問題を、占領下の被爆地広島運動に即して考えることができるのであり、運

動史の観点からすると、これは得がたい資料である。

三点目は、山陽地方の拠点サークルとしての裾野の広がりをもっているという点である。『われらの詩』に注目することによって、山陽地方のさまざまなサークルの具体像が見えてくるのに加えて、プランゲ文庫の資料と組み合わせればそれらのサークルの前史について調べることもできるし、峠三吉資料と組み合わせればそれらのサークルの実態についてさらに詳しく知ることもできるであろう。

四点目は、ほかのサークル詩誌の場合であれば考えられないほど大量で良質な関係資料（峠三吉資料）が残されている、という点である。草稿類、文書類、関係詩誌に加えて、峠三吉の日記が

残っているという点は、決定的に重要である。

おわりに

『われらの詩』は以上のような特質をもったサークル詩誌であり、近年の研究動向のなかで特別な重要性をもった資料であると考えられる。

私としては、『チンダレ』を復刻したときと同じように、『われらの詩』研究会を立ち上げて基礎的な研究を行いながら、復刻版刊行の可能性をも探っていきたいと考えている。